

学 校 法 人 神 奈 川 大 学

知 識 情 報 研 究 所 開 所 記 念 講 演

「 日 本 と 国 際 社 会 」

外 務 省 顧 問

前 駐 米 大 使

大 河 原 良 雄

本日は神奈川県立神奈川大学知識情報研究所の開所に当たり、特別記念講演にお招き頂き光栄に存じます。

そして只今は藤原所長から温かい心のこもったお言葉を頂き、まことにうれしく有り難く存じます。

日本、そして国際情勢は大きな変革期にあります。

今から七年前、東京でサミットが行われましたときはオイルショックの真只中で日本はその乗り切りに必死の努力をしておりました。その我が国にとって死活の問題である石油の割当てをサミットの参加国は議したのでありますが、開催の主催国である日本は、その事前の相談ではかやの外におかれ、予め議論された結果を会議で吞まされたのでありました。その七年後の今年のサミットでは日本は始終主導的に世界の経済の動向の決定に関わったのであります。

我々は今、科学技術の革新の真只中にくみこまれています。それは世界を小さくし、その中でいかに我々が平和を実現し発展をつづけるかを考えねばならなくなっています。

さる二、三日前、USスチールは表看板の鉄鋼を一部門に格下げし、社業の新展開をはかることを発表しました。さらに、最近我々を驚かせたニュースはバロース社がスペリー社を合併したことであります。アメリカにおいて会社の合併はきわめて日常のことなのでありますが、このニュースが格別の出来事として人々を驚かせたのは、小さなバロース社が巨大なスペリー社を吸収したということ、すなわち小が大をのみこむ事態が起こったということなのです。

このように今迄の世界で決定的な大小の差のあるものの間に逆転的な併合がおこる、そういう事態がおこる時代だということに我々は驚くのであります。

アメリカで起こることは、時間がたつと他で起こるのはよく見られることでありますから、恐らくこのようなことは他の地域でも起こることであろう。そのような今迄の経験では予想もつかない事がおこる時代であるということなのであります。世界が小さくなっているということでは、アメリカがアジア太平洋地域を重視しなければならなくなったことも事実です。

私は先月、経団連のスペイン、ポルトガルへのミッションに参加しました。時あたかも両国は本年1月よりECに加盟しましたが、政府当局はもとより国中が湧き立っております。それは長らくイベリア半島にうずくまってきたポルトガル人一千万、

スペイン人三千万の人々がE Cの三億二千万人とコミュニティをつくり、大きなマーケットに参入することを喜んでいたのであり、さらに世界にとってはポルトガル語圏一億五千万人、スペイン語圏三億五千万人が連帯の道をすすめ得るということであったのであります。

さて、このようなことはメリットのみではありません。いくつもの困難もおこると考えねばなりません。スペイン、ポルトガルの両国が新しい産業化の波にさらされ、生活から産業構造からすべての面で新しく変化にさらされることも当然予想されることなのであります。そこでその変化をよく見定め正しい対応をしなければならない時代なのであります。

このような変化の時代、そしてそれへの対応が求められる時代、これが我々日本のおかれている時代なのであります。かつて世界を圧倒する力をもっていたアメリカ経済は余裕を失いつつあります。他方、世界では経済大国日本というイメージが定着しつつありますが、国内の意識はまだそうなっていません。国内経済はまだ自己中心で、島国時代の意識から脱けきれずにいます。経済をみるとアメリカは日本を過大評価し、日本は自分を過小評価しています。

日本が第2の経済大国の位置を占めた現実を認識し、根本的な責任を公平に分担することが肝要で、政治もそのようになってゆかなければなりません。

市場開放、産業構造、内需拡大、このどれもが痛みを伴うものですが、ほどほどにやっていくということが出来なくなりつつあります。経済力も競争力も、影響力も大きくなったのです。しかも自他の見るところに大きく違いがある。これが現在のおおきな問題といわざるを得ません。

去年7月、ライシャワーさんは毎日新聞のインタビューに応じ日米関係について論じておられます。その言葉は正しいと思います。ライシャワーさんがそこでいわれたことは、米国は日本を戦争直後の時期には疑いと猜疑心でみていた。ついで戦後40年を経て、米国は日本を平和を愛する重要な同盟国であるという認識でつきあってくれるようになりました。しかし、昭和60年度の日本の492億ドルの経常収支の黒字のうち417億ドルがアメリカの負担であるということ、すなわち日本の経常収支の黒字の82%がアメリカの赤字によるということは健全ではないと指摘されるのです。

かつてOPECは世界から500億ドルのお金をかき集め、世界の恨みを買いました。今、日本は、それと同じ金をもっているのです。そこでライシャワーさんは、二つの警告をしています。一つは日本について世界が恐怖心をもち始めていること、もう一つは、余りに日本の企業がうまくやったので、その結果傲慢になってきている。この二つをよく認識すべきだということです。日本は米国にある需要に応えた供給をして何故悪いのか。欧米の赤字は産業の空洞化が原因ではないか。さらには貯蓄型でない国民性によるのではないかといっている日本の言い方を憂慮されているのです。

アメリカ人が被害者意識、恐怖意識を来したことは、その声が非常に政治的な力となってくことを意味します。すなわち、経済の論理のみでゆかない事態が生じている訳です。我々はいま、その大事な時にあることを認識し、正しい対応をしなければならないのであります。御静聴有り難うございました。